2024 年 6 月 19 日（水）

「水曜サロン with 赤堀会長」第 6 期 第 2 回（通算 76 回）

真の探究心やエージェンシーが育まれる学び舎のカルチャーとは？

１．内容

〇アメリカの High Tech High と One Stone という 2 つの学校では一人ひとりが探究心をもって学びを自分事としてとらえている生徒が増えている。

〇記憶中心の学習から対話的で主体的な学習に舵を切るときに、カリキュラムだけを刷新してもうまく変わっていくことができない。新しいカルチャーを組織全体で形成していくことが大切。

〇深い学びのカルチャー形成に寄与する 8 つの要素（by Project Zero, Harvard GSE）で取組を整理。

Expectation	・High Tech High のミッション「どの様な経済環境や家庭環境の子どもにも平等に学ぶ機会を与えることで、個々人の可能性を花開かせる」。結果 96%が大学進学、86%が大学卒業。 ・One Stone のスローガン：「Disrupt for Good」（社会をよくするために、現状打破を恐れない）
Language	いずれの学校も、前述の高い目標に対して先生も生徒も共通の具体的な言葉で言語化している。「教育目標」「成績証明書」など。
Opportunities	High Tech High では公立校でもあり生徒の経験値・前提知識がそれぞれ違う。プロジェクト学習では、経験値を平準化するために、共通の体験をつくる「プロジェクトローンチ（例：校外に出かける、何かを作ってみるなど)」の活動からスタートする。
Modeling	One Stone での事例では、生徒から先生へのインタビューで、先生はすべてをわかっているわけではない、弱みもある中で勇気を出して新しいことにチャレンジしている姿を見せている。
Time	時間割の弾力的な工夫。
Routines	・High Tech High では生徒相互の建設的批評をルーチン化。 ・One Stone では「YouRock（君はすごい)」という取り組みで、先生や生徒に推薦された生徒をみんなで称える。
Interactions	High Tech High では安心安全な環境で相互に建設的に批評し合う。ポイントは、Be Kind（やさしく）／Be Specific（具体的に）／Be Helpful（役立つように）
Environment	High Tech High は美術館のような作品展示。

２．所感

上記のように 8 つの要素に分類して具体的な事例とともに 2 校の取り組みを分かりやすくご紹介いただきました。それぞれ日本の学校においてもとても参考になるものだと感じました。

プロジェクト学習のスタート時における経験値の平準化、「探究」は決して学校の中だけでのことではなく、社会に出てからも探究し続けていくのだということを先生へのインタビューを通して理解を促す、安心安全で建設的な批評を行うための 3 つのポイントなど、すぐにでも取り入れることができるのではないかと思いますし、すでに国内でも実践されている先生もいらっしゃると思います。ただ、それが一人の先生の取り組みにとどまらず、学校という組織の「カルチャー」として根付いて、

クラス担任、教科担任が替わっても、生徒は同じように主体的に学びに向かうことができる、ということがとても大切なのだと思います。そして、教育目標やその裏返しである評価指標等を、生徒自身が得心する言葉で言語化し、先生と生徒で共有することが、ご紹介いただいた両校の取り組みを支える基盤になっていると感じました。

多くの学校で、「総合的な学習の時間」「総合的な探究の時間」の評価のためにルーブリックを作成していると思います。週 2 時間ほどの授業の評価のためだけでなく、学校経営計画等に書かれている教育目標や校訓等を総合的に見て、学校としての生徒の成長目標と成長の評価指標を整備し、学校の「カルチャー」を確固たるものにしていく、ということが、学び方の変革を求められている今、とても重要なのだと気づかされました。

竹村さん、ありがとうございました。